

球磨地域での夏秋期におけるナス「ヒゴムラサキ」のフルオープンハウスでの栽培適応性

夏秋期における「ヒゴムラサキ」の栽培では、株間を広くとり疎植にしたほうがよい。また台木には、果実の肥大がよく収量性に優れる「トルバム・ビガー」が適している。

農業研究センター 球磨農業研究所 (担当者: 本岡 圭)

研究のねらい

球磨地域では、近年夏秋ナスの栽培が増えつつある。そこで、県で育成された良食味のナス「ヒゴムラサキ」の当地域における夏秋期の安定生産技術を確立するとともに、地産地消の新規品目として半促成メロンの後作に導入した場合の収量性を明らかにする。

研究の成果

1. 「ヒゴムラサキ」は、「筑陽」に比べ葉が大きく節間が詰まっているため(表1)、落花を防ぎ商品果を多くするには株間を80cmと広げ疎植にしたほうがよい(表2)。
2. 台木は、秀品率や果実の肥大が良く、収量性に優れる「トルバム・ビガー」がよい(表3)。

普及上の留意点

1. 仕立て方法は4本仕立てである。また、側枝の果実を収穫する際には1芽どりを徹底し、過繁茂にならないようにする。
2. フルオープンハウスは、梅雨明け後には天井ビニールを巻き上げている。
3. 台木の「トルバム・ビガー」は、青枯病の抵抗性をレース、 、 、 についてもっているが、レース に汚染されているおそれのある圃場では、あらかじめ菌密度を下げるよう土壤消毒を行う。

[具体的データ]

表1 定植後48日めにおける生育(平成12年度)

	側枝			最大葉		最大葉下の
	長さ (cm)	展開葉数 (枚)	平均節間長 (cm)	葉長 (cm)	葉幅 (cm)	茎径 (mm)
ヒゴムラサキ	42	9.7	4.3	30.6	15.7	10.7
筑陽	52	9.5	5.5	22.9	13.6	10.0

台木はいずれも「台太郎」。定植日:4月18日。各10株平均。
栽植様式はいずれもうね幅2m、株間65cm。

表2 株間の違いによる収量比較(平成14年度)

	栽植本数 ¹⁾ (株/10a)	商品果率 (本数比%)	商品果本数 (本/10a)	商品果 1果重 (g)	商品果収量 (kg/10a)
株間65cm	770	72	42,649	322	13,723
株間80cm	625	75	41,979	333	13,990

注1)うね幅はいずれも2m。

供試品種はいずれも「ヒゴムラサキ + 台太郎」。

定植日:5月13日、収穫期間:6月中旬～11月中旬。

表3 台木別の収量・粗収益(平成14年度)

穂木	台木	秀品率 (本数比%)	商品果率 (本数比%)	商品果本数 (本/10a)	商品果 1果重 (g)	商品果収量 (kg/10a)
ヒゴムラサキ	台太郎	58	75	41,979	333	13,990
"	トルバム・ビガー	62	79	44,583	350	15,610
"	トナシム	62	78	42,153	351	14,814
筑陽	台太郎	81	92	73,834	200	14,795

栽植様式はいずれもうね幅は2m、株間は「筑陽 + 台太郎」のみ65cm、それ以外は80cm。